

航空医療搬送チーム 極限状況での多数傷病者対応訓練を実施 *AE teams train for high-stress mass casualty response during local training*

September 4, 2025

By SSgt Manuel G. Zamora
374th Airlift Wing Public Affairs

7月22日、嘉手納基地第18航空医療搬送中隊の空兵は、ケンタッキー空軍州兵の第3海兵師団と165空輸中隊と合同で、多数傷病者対応を想定した訓練を実施した。この実働訓練では、インド太平洋地域の複数拠点を想定した医療搬送手順を確認した。

訓練では、ケンタッキー空軍州兵のC-130Jスーパーハーキュリーズを使用し、航空医療搬送チームは通常の任務環境を超え、最小限の指揮・統制しか受けられない有事を想定して対応にあたった。第18航空医療搬送小隊教官コートニー・スミス技能軍曹は、「この現実に近い訓練は、実戦での即応力を養うために欠かせない」と話す。

スミス技能軍曹はさらに、「今日の訓練の目的は、多数の傷病者発生時に航空医療搬送チームが適切にトリアージ、治療、搬送できるかを検証することだ。患者が安定し、本拠地から十分な支援が得られる平時の任務とは異なり、限られた資源の中でプレッシャーに対処する適応力が試される」と説明した。

訓練は、3段階のシナリオで構成された。第1段階で乗員たちは標準的な航空医療搬送任務を実施。第2段階では、飛行中に状況が変更され、57名の患者を想定した多数傷病者対応に切り替えられた。最終段階では、第2の航空医療搬送チームが引き継いで、長時間の飛行中に継続的に外傷ケアを行った。

スミス技能軍曹は、「乗員たちは何が起こるか全く知らされずに臨んだ。実際の任務でも、飛行中に多数傷病者の対応に迫られる可能性がある。猛暑の中、完全防護服を着て数十人もの患者を処置しながら冷静な判断を下すというプレッシャーを体験させるのが狙いだった」と述べた。

訓練ではマネキンではなく隊員が患者役を務め、限られた資材で作業を行った。また、通信も模擬ではなく、ハワイの指揮・統制部隊と連携する形で実施され、現実に即した対応力を養った。

第18航空医療搬送中隊の戦術主任ジーニー・キバート少佐は、「合同訓練を通じて、各部隊の手順やコミュニケーション方法、運用上の制約に触れることで、部隊間の連携力を高める。それによって、互いの信頼関係を強化され、任務遂行力の向上につながる」と述べた。

今回の訓練は、インド太平洋地域における実戦的条件下での訓練を通じて、太平洋空軍の地域即応態勢を強化するという広い目的を持つ。地域内での訓練により、航空医療搬送チームは厳しい気象条件、長時間飛行、限られた資源など、実際の運用上の課題を体験する機会になった。

またスミス技能軍曹は、「隊員が極限状況でも精神的・身体的に対応できるよう備え、創造的に考え、航空機的能力を最大限に活用する力を養っている」と加えた。

1週間にわたる訓練で、乗員たちは戦術的戦闘傷病者処置の原則を適用し、極限の状況下での外傷対応を実践した。スミス技能軍曹は、訓練の成功は隊員たちの成長に表れることに触れ、「参加者が自信を高め、訓練の意義を理解して帰還できれば最高だ。さらに、今後の訓練計画を改善するための貴重なデータも得られる」と締めくくった。

